

平成 22 年 6 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520269

研究課題名（和文）ヴァイマル共和国時代における文学の大衆化とジェンダー

研究課題名（英文）The Popularization of Literature and the Gender Structure in the Weimar Republic

研究代表者

田丸 理砂 (TAMARU RISA)

フェリス女学院大学国際交流学部 准教授

研究者番号：40386925

研究成果の概要（和文）：本研究ではヴァイマル共和国時代の女性と文学の関係を都市大衆文化の文脈から探った。ヴァイマル時代のベルリンに成立した都市大衆文化は女性作家に表現の可能性を拓いた。マスメディアは多くの読者を獲得するために女性の表現者を求め、女性作家の中には、当時の憧れの女性像「新しい女」のイメージを代表する都市の女性ホワイトカラーの現実を、女性の視点から描く者も現れた。ヴァイマル時代の女性作家の急増は文学の大衆化をもたらし、文学における女性の世界の発見へと導く一方、結果として文学の場に新たなジェンダー構造を築くことにもつながった。

研究成果の概要（英文）：In this study, the woman authorship in the Weimar Republic was analyzed from the context of the mass urban culture. The urban popular culture of Berlin in the Weimar era provided women writers with more freedom and possibility in their writing. In order to expand their readership, the publishing industry needed woman writers. Among these, there appeared some who portrayed the reality of urban female white-collar workers who represented the ideal image of the "New Woman" of the era. The marked increase in the number of women writers in the Weimar period resulted in the popularization of literature. This led to the literary discovery of the world of woman, but, on the other hand, led to a new gender structure in the field of literature.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：独文学・ジェンダー・都市論・表現

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本におけるヴァイマル共和国時代

の文学および文化研究において、女性作家が

急増した時期であるにも拘らず、女性作家やジェンダーの視点からアプローチを試みた研究はほとんど見られなかった（ただし歴史学においては研究蓄積が認められる）。

(2) 一方、ドイツやアメリカ合衆国におけるドイツ文学研究では、1980年以降、フェミニズム文学研究が進むなかで、ヴァイマル共和国時代の女性作家が掘り起こされるとともに、当時の女性作家についてのジェンダー視点からの研究が進み、とくに1990年代以降、その傾向は目覚ましい。

(3) (2)の研究においては、たんに文学にのみ注目するのではなく、当時の社会状況や他の芸術活動（サブカルチャーも含む）にも関心を広げ、またグローバリゼーションの文脈のなかから女性と文学の問題は学際的にとらえられている。

(4) 報告者は1995年以降、ヴァイマル共和国時代の女性作家の研究を続けてきたが、そのなかで個別の作家の紹介やその作品分析について扱ってきた。本課題を科学研究費補助金に申請するにあたり、報告者は、女性の表現に可能性を広げることになった都市を新たな文学の生産の場としてとらえるとともに、作品の評価とジェンダーの関わりを明らかにしたいと考えていた。というのもモダン都市ベルリンの成立は表現する女性に多くのチャンスを与える一方（表現の可能性の拡大）、大衆化された文学の価値は急速に下がっていくなかに（評価システム）、新たなジェンダー構造の構築の兆しが認められると推測したからである。

2. 研究の目的

本研究ではおもにヴァイマル共和国時代に活躍していた三人の作家、イルムガルト・

コイン、マリールイーゼ・フライサー、ガブリエレ・テルギットの作品および彼女たちの作家活動を取りあげ、以下の点を明らかにすることを旨とする。

(1) 当時マスメディアでもはやされた都会の自立した女性像「新しい女（die Neue Frau）」と女性による文学の関係、あるいは文学の大衆化（イルムガルト・コイン）。

(2) 文学の生産の場としての都市とそこに働くジェンダー力学（マリールイーゼ・フライサー）

(3) 文学作品に見られる映画や他の芸術分野の影響（フライサー、コイン）

(4) 女性とマスメディアおよびジャーナリズムの関係（ガブリエレ・テルギット）

(5) ベルリンと女性作家（フライサー、コイン、テルギット）

(6) 女性作家の作品の評価とジェンダーの関係（フライサー、コイン、テルギット）

また本研究の終わりには、本課題の成果、及びこれまでの個別研究を著作としてまとめたい。

3. 研究の方法

(1) 文献収集（ベルリンの国立図書館およびドイツの書店）

(2) 作品の成立の場の調査（ベルリンおよびインゴルシュタット）

(3) 文献購読および作品分析

(4) 論考の執筆

4. 研究成果

(1) 本研究の成果（以下に研究成果をまとめた著作〈今夏刊行予定〉の構成に沿って、研究成果を報告する）

① 女性作家によって描かれたベルリン

まずイルムガルト・コインの『偽絹の女の子（Das kunstseidene Mädchen）』を題材に、当時の若い女性から見た大都市ベルリンの

イメージの再現を試みた。ここでは新しいテクノロジー、電気による電化の進んだモダン都市（地下鉄や明るい夜の町）、政治の中心としての首都ベルリン、また世界大恐慌後の疲弊した町をどのように地方出身の若い女性が認識したのかを、ベルリンのそれぞれの地域の特徴と結びつけながら論じた。またそれとともに夜の町を女性の視点から描くことの新鮮さを指摘した。

② 文学作品に描かれた女性ホワイトカラー

当時都会の自立した女性像「新しい女 (die Neue Frau)」の典型としてマスメディアなどで女性ホワイトカラーがもてはやされたのは、20世紀初頭に急増したそれがモダン都市ベルリンを特徴づける職業だったからである。文学作品における女性ホワイトカラー像をマーシャ・カレコ、クリスタ・アニータ・ブリュック、イルムガルト・コインの詩および散文作品から分析した。みずからも事務職のホワイトカラーとしての勤務経験のあるこれらの作家たちによって描かれた若い女性たちは、マスメディアで流布していた華やかなイメージとは非常に異なっている。

カレコは都会のホワイトカラーたちの慎ましやかな生活や慌ただしい町のテンポを非常に即物的な言葉で書き出している。

ブリュックの作品の注目すべき点は、そこでは職場で蔑みを込めて「女の子」と呼ばれる女性ホワイトカラーの出世の困難さや彼女たちが日々さらされていた職場でのセクシャルハラスメントが扱われており、「新しい女」の一般的なイメージとは裏腹の女性ホワイトカラーの苦難がテーマとなっていることである。

コインの主人公たちには、みずから「女の子」と名乗ることで、蔑みを込めた一般的な

「女の子」から「若くて美しいこと」へと「女の子」の意味を肯定的にとらえ直しているところに新鮮さがある。しかしながら彼女たちが「若さ」を武器にのし上がろうとすると、大恐慌後のベルリンで現実の厳しさを目の当たりにすることになる。コインの小説では「若さ」だけでは結局時代の困難を乗り越えられない、「新しい女」の置かれている状況のアンビヴァレンスが描かれ、時代の理想の女性像「新しい女」の限界が示唆されている。

③ 女性作家と出版メディア

女性作家と出版メディアを考察するにあたり、出版メディアとゆかりの深い二人の作家、ガブリエレ・テルギットとヴィッキィ・バウムを取りあげた。ベルリンは当時出版メディアの中心地であった。ヴァイマル共和国時代、ベルリンの大手出版社ウルスタインと専属契約を結び大成功を収めたバウムは印刷メディアの最初のスターである。バウムを売り出すためのメディア側の戦略を紹介し、またバウムのベストセラー作品『化学専攻生ヘレーネ・ヴィルヒュア』を考察し、そのヒロイン像の新鮮さと保守性を示した。バウム最大のベストセラー『ホテルの人々』についてはまた、小説の舞台ベルリンはかならずしも重要ではなく、ホテルのもつ無国籍性が世界的なヒットにつながったのではないかと指摘した。

一方みずから新聞記者として活躍していたテルギットはマスメディア自体を題材とした小説を発表している。テルギットの小説においては、加熱したマスメディアの報道がスターという虚像を作り出していく仕組みが、ベルリンの社交界や不動産投機などとともに書き出されている。またこの小説には「新しい女」よりも上の世代の市民層の女性たち（第一次世界大戦で結婚相手となる世代

の男性を失った「余った女たち」)の抱える問題点が描かれている点が興味深い。

④ ヴァイマール共和国時代の新しい女性のタイプ

ドイツの「新しい女」を当時世界各地で同時代的に起きていたモダンガール現象の一環としてとらえ、なかでも人気のタイプ「ガール」と「ガルソヌ」の特徴を示した。より一般的であった「ガール」は1920年代に新しく変化したアメリカの理想的女性像(若い女性)を表している。映画が隆盛をきわめた時代、世界各地で人びとが同じスターに憧れるということも認められ、こうしたことはモダンガール現象がグローバリゼーションの先駆けともいえる現象であったことを示している。また自立したイメージの強い「ガルソヌ」については先のテルギットの小説の女性の登場人物を取りあげ、「ガール」と「ガルソヌ」のイメージを比較することで、その両者の間に見られる階層性を指摘した。

⑤ 女性作家の増加により発見された「女同士」の関係

女性作家の増加は、美的世界において、これまで描かれたことのない新たな領域の発見につながる。文学において個別的(ジャンヌ・ダルクなどの孤高のヒロインとして)、男性登場人物の関係者(妻、子ども、恋人など)として、あるいは集団で女性は描かれてきたが、たがいの感情のやりとりを扱う女性同士の関係が詳述されることはほとんどなかった。女性作家が急増したヴァイマール時代は女性の経験世界、たとえば「女同士」の関係が文学の世界で発見された時代である。こうした傾向は文学のみならず映画にも見られ、女性の制作者、女性の出演者によって作られた映画『制服の処女』(1931)にも同

様のことがあてはまる。本研究では女同士の友情が描かれている文学作品としてはフライサーの『少女イエラ』を取りあげ、分析した。

⑥ 「ベルリン」対「地方」および女性作家の居場所

ベルリンがモダン都市として特別な位置を占めたヴァイマール時代には「ベルリン」対「地方」をめぐる激しい論争が繰り広げられた。これまでの文学研究において、この対立は前衛作家(ベルリン)と保守派あるいはナチ(地方)ととらえられることが多かったが、本研究ではマリールイーゼ・フライサーの作家活動と作品を取りあげることにより、「ベルリン」対「地方」の二項対立には「男性」対「女性」というジェンダー構造が見出されることを指摘した。フライサーの作品では「新しい女」の生き方を拒絶し、孤独を覚悟して自由を選びとる新しいタイプの女性像が生み出されているのが、これまで取り上げた女性像とは違う点である。これらのヒロインもそれを生み出した女性作家同様、まだ社会に居場所を築くことができずにいることは、一見解放されたかに見えたヴァイマール共和国時代の女性たちの現実も見出される。

⑦ 「新しい女」たちのその後

「新しい女」およびフライサーによって生み出された新しい女性像も結局その後ナチが政権を握ることによって、その後新たな展開を迎えることはなかった。

また本研究で扱った作品では「新しい女」やその魅力である「若さ」がかならずしも、絶対的な力をもつとは言えなかったのは、それらのほとんどが1929年末の大恐慌後に執筆されたことと関係していると推測さ

れる。

しかしそれとともに多くの女性たちによって文学が書かれたことはなるほど文学の大衆化を招き、それにより文学の芸術的価値は下降することとなるが、美的世界における女性の経験や感情の発見は、文学に新たな可能性を生み出したこととして肯定的にとらえられる。

(2) 本研究の独創性

① 文学の大衆化が女性に表現の可能性を拓げ、また女性作家が増えることによって、美的世界でこれまで取り上げられたこのないモチーフが発見されることになったということを指摘し、それについて作品を具体的に分析したこと。

② しかしその一方で、女性が文学の世界に進出することで、女性と男性の間にこれまでとはちがう新たなジェンダーによるヒエラルキーが築かれたことの指摘。

③ これまで日本の独文学研究において、ほとんど扱われてこなかった女性作家やその作品について紹介。

(3) 今後の課題

① 本課題を遂行中にも同時代の男性作家やドイツ語圏出身ではない作家によるベルリンを舞台とした小説を読んできたが、まだ細かな分析をするには至っていないので、それについてまとめ、それぞれにどのような特徴があるのかを考察したい。

② 文学に見られる他の芸術分野の影響だけでなく、ヴァイマル共和国時代の芸術

／文化運動のなかからジェンダーと文学の大衆化の問題をとらえなおすことにより、時代の文化傾向と共通性（たとえ住宅団地の建設や写真など）と文学という表現手段の特性を探りたい。

③ 本研究は 1920 年代の文学の大衆化による女性作家の増加を現代ドイツ女性文学の先駆けとしてとらえる立場から出発している。これまでも報告者は 1920 年代の文学作品の研究と現代の女性作家の研究を並行して続けてきた。1990 以降、ドイツ統一によりふたたび首都としての機能を取り戻したベルリンで女性作家によってさまざまな作品が執筆されている。これらについて都市と女性作家との関係に取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① 田丸理砂、ベルリンとふたりの女性作家——マーシャ・カレコとヴィッキイ・バウムについて、2008 年度フェリス女学院大学学内共同研究『都市とジェンダー——現代的な生の条件とその表象をめぐる学際的研究』、査読無、2009 年、pp.155-171
- ② 田丸理砂、Mädchen 像の変容とそのスペクトルム——マリールイーゼ・フライサーのヴァイマル期の散文作品における Mädchen について、『WASEDA BLÄTTER (ワセダ・ブレッター)』、査読有、16 号、2009 年、pp.59-78
- ③ 田丸理砂、イルムガルト・コインーワイマル共和国末期に現れたベストセラー作家、2007 年度フェリス女学院大学学内共同研究『ジェンダーと表現——「女性に対する暴力」を無くすためのもう一つの視点からの試み——』、査読無、2008 年、pp.65-97

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 2 件）

- ① 田丸理砂、フェリス女学院大学、『モダンガールが描いた世界』（仮タイトル）、2010 年 8 月刊行予定、頁数未定

② 田丸理砂、他、鳥影社、『ドイツ文化を担った女性たち』、2008年、pp. 78-95

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田丸 理砂 (TAMARU RISA)
フェリス学院大学国際交流学部 准教授

研究者番号：40386925

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし